

鯉淵学園農業栄養専門学校アグリビジネス科 国際農業コースで学ぶ留学生の日本語学習者の特性

～ビリーフ調査結果を中心に～

カムガムチョン・ジャルニー¹

¹ 鯉淵学園農業栄養専門学校 アグリビジネス科

(受付：2021年10月14日／受理：2021年11月5日)

摘要：本研究は鯉淵学園農業栄養専門学校アグリビジネス科国際農業コースで学んだ留学生の日本語学習者のビリーフ^(注1)調査結果をまとめたものである。ビリーフについては①教師の役割、②言語学習の適性、③言語学習の性質、④学習者の自律性、⑤学習ストラテジーの5つのグループ61項目で調査を行い、その結果を考察した。分析の結果、本コース留学生の日本語学習者のビリーフには(1)教師への依存度が高く、学習面でのアドバイスを求めている。教師への依存度が高いと考えられるのにも関わらず、学習に進歩が見られなくても、そのことを教師の責任だとは考えていない。(2)言語学習について楽観的で教師の直接指導に対して期待が高いことが窺えた。(3)外国語学習はすべての人が習得できるが、日本語は他の言語より難しいと考えている。(4)学習者は教師の指導によって自律的に学習できるようにもなる。(5)目標を立て、努力することの重要性は理解しているが、まだ行動には結びついていない。(6)語彙学習が重要だと考える傾向にある。(7)日本文化学習が日本語学習の一助となると考えている。(8)学習面では、教科書を用いて、やさしい文型から難しい文型へ積み上げて、分からない単語があれば、辞書で調べる等正確性を重視しているが、言語使用面では常に正しい日本語を話さなければならないとは考えておらず、文法は間違っている、日本人と話すことを楽しむ傾向にある。(9)定期的なテストや教科書が必要だと考え、伝統的な学習方法を好む。(10)国外で行われた調査と比べて、「語彙」「読解」「文字・作文」を上達させたい言語技能の上位に挙げる学生が多く、反対に、「聴解」の順位は押しなべて低い。以上の10の傾向がある事を明かにした。本コース留学生の日本語能力が日本語を用いて就業可能な水準レベルに達するには効果的・効率的なカリキュラムへの改定が必要だが、教師が学習者の希望を把握した特性を生かす教授法、教室活動を行うことも同時に重要であると考えられる。

キーワード：日本語学習者、ビリーフ、BALLI、自律学習、教授法、教室活動

I はじめに

鯉淵学園農業栄養専門学校（以下、KOIBUCHI）のアグリビジネス科国際農業コースは2018年に設置され、外国人留学生を受け入れるようになった。コース内には、養鶏学を中心に、日本語、日本文化の講義も開講された。本校の留学生は、入学前に国内の日本語学校で6ヶ月から1年間日本語を学んでいたが、日本語検定を持っていない人もある程度いることも事実である。本校を卒業時によりよい就職

ができるために、日本語教育に関しては日本語能力試験N2相当を取得することを目標としている。しかし、実際に教えると、日本語能力試験N2相当の文字、語彙、文法等の数が多すぎることが分かった。前期・後期で60時間しかないにもかかわらず、短い準備期間でこれからも日本語の講義が開講される現状から考えると、留学生の日本語学習者のビリーフを知っておくことは、1年間のシラバス作成、授業の組み立て方や教材の選択等を考える際に必要なことだと考える。

¹ 〒319-0323 茨城県水戸市鯉淵町 5965

(注1) 本研究でのビリーフの定義は「人が自覚的・無自覚的にもっている言語学習についての考え方で、それまでの経験や知識などから形作られるもの。」とする。

II 研究の目的

本研究の目的は、KOIBUCHIにおける留学生の日本語学習者のビリーフを明らかにすることである。本調査によって得られた結果を踏まえ、留学生に適した日本語教室活動や指導法を提案する。

III 先行研究

日本語教育学会『新版日本語教育事典』(2005:807)では、「言語学習についての信念(ビリーフ)^(注2)とは、言語学習の方法・効果などについて人が自覚的または無自覚的にもっている信念や確信を指す」とされ、教師と学習者の間にはビリーフのギャップが存在し、「こうした場合、両者の調整が不十分のまま授業を強行すると学習者の積極的な参加を得ることはできない」とされている。そして、「文化的背景の違いによる信念の違い」があるとされている。

Horwitz (1987) は、言語学習者のビリーフを把握するために、「言語学習の適性 (Foreign Language Aptitude)」、 「言語学習の難易度 (The Difficulty of Language Learning)」、 「言語学習の本質 (The Nature of Language Learning)」、 「学習とコミュニケーションストラテジー (Learning and Communication Strategies)」、 「動機 (Motivations)」の5領域・34問の質問項目から成るBALLI “Beliefs About Language Learning Inventory”を作成した。BALLI 調査の方法は、一つの項目の短文について、回答者が「1. 強く同意する」、「2. 同意する」、「3. 同意も反対もしない」、「4. 反対する」、「5. 強く反対する」の5段階の中から自分の考えに近い段階を選ぶものである。

ビリーフの先行研究は、学習者への調査と教師への調査の2グループに大別される。現在では様々な研究者がこれを元に自身の研究の目的に合うようにビリーフ調査票を作成し、調査を行っている。

齊藤 (1996) は、日本語学習者の自律的学習を促す効果的な支援策を模索する目的で、教師と学習者のビリーフを調査し、比較を行った。調査の結果、両者ともに自律的学習を理想としながらも、現実的には難しいと考えていること、教師への依存という点では学習者の方が教師より従来の教師伝達型指向

の考え方が強いことが明らかになった。また、ビリーフを把握することによって具体的な支援策を把握することができることも述べている。

板井 (1997, 2000) は、中国の日本語学習者を調査した。その結果によると、中国の学習者は「文法の学習」「語彙や文型の反復・暗記学習」「母語による文法説明」「教師中心の授業」というビリーフが根強いことがみられた。クラス活動に意欲的であり、教師以外の学習方法も知っている。

府川・佐藤 (2002) は、メキシコの中学1年生から高校3年生(日本の学齢と同一) 333名にビリーフ調査を行い、生徒の意識として「上達に最も効果があるのは日本へ行くこと、次いで語彙、文法の学習。よい発音が重要」と挙げたという。また、「自分は外国語学習の適性があり」、「3～5年で日本語が上手に話せるようになる」という回答が多かったと報告した。

小林 (2016) は、タイ中等教育機関でチームティーチングによる授業を受けている日本語学習者のビリーフ調査を行っている。調査の結果からみると、タイ中等教育の日本語学習ビリーフの傾向は次のようになる。4技能のスキルの中で語彙学習が重要だと考える傾向にあること、アクティビティのある参加型の教室活動を望むこと、日本語を話すことに対する不安から、自身の日本語能力に自信を持っている学習者は少ないこと、教師の年齢よりも性格を重視する傾向にあると述べている。

松本 (2019) は、日本語母語話者教師 (NT) と日本語非母語話者教師 (NNT) のグループにおいて、全51項目中27項目において有意な違いを確認している。違いを確認することにより、「現地教師養成」やチームティーチングに役立てることができると考えた。コスタリカにおけるJICAボランティアの仕事の1つに、「授業を通してのアシスタントに対する日本語教授法の指導」というものがあり、現在の喫緊の課題となっている。教師養成をするにあたり、その違いによって指導方法を変容させてしまうことは良いかどうかは検討の余地があると思われる。日本語非母語話者教師 (NNT) には日本語母語話者教師 (NT) にない良いものがあり、それを確認することから、教師養成の方向性は決まって

(注2) この分野に関する先行研究では、BELIEFS, belief, 信念, 確信, ビリーフス, ビリーフなどの用語が使われているが、本稿ではビリーフと表記する。

くと述べている。

IV 調査方法

1. 質問紙の作成

若井・岩澤 (2004) は学習者だけでなく教師のビリーフを知るために、「教師の役割」についてのビリーフを問うグループを入れることで、「教師が教師の立場で回答がしやすいように」配慮されたビリーフ調査票を作成した。本研究ではこれを参考に一部改編し、全 61 項目の調査票を作成した。各領域及びそれぞれの項目数は以下の通りである。

- (1) 教師の役割：15 項目
- (2) 言語学習の適性：6 項目
- (3) 言語学習の本質：13 項目
- (4) 学習者の自律性：14 項目
- (5) 学習ストラテジー：13 項目

質問に対する選択肢としては「強く賛成」、「賛成」、「どちらでもない」、「反対」、「強く反対」の 5 段階尺度で答えてもらう方式をとった。結果をまとめる際は、「強くそう思う」、「そう思う」を「賛成意見」とし、「あまりそう思わない」、「そう思わない」を「反対意見」とした。回答方法は BALLI と同じく「強く賛成 (1)」、「賛成 (2)」、「どちらでもない (3)」、「反対 (4)」、「強く反対 (5)」の 5 段階評定とした。

2. 調査期間及び調査対象者

調査期間及び調査対象者は表 1 のとおりである。調査は 2021 年 2 月と 4 月に調査票のアンケートを学生に渡し、後日回収する方法を取った。調査票は全て日本語で名前は無記名とした。調査対象者は KOIBUCHI のアグリビジネス科国際農業コース日本語学習者 33 名；出身国 (人数)：タイ (15)、インドネシア (8)、ベトナム (4)、バングラディシュ (2)、ネパール (2)、インド (1)、スリランカ (1)

表 1. 調査期間及び調査対象者

時期	2021 年 2 月 (後期終了時) と 2021 年 4 月 (前期開始時)
対象者	鯉淵学園農業栄養専門学校国際農業 コース学生
回答者数	33 名
調査方法	アンケート

V 結果と考察

質問項目は上述 IV-1 のとおり 5 つに類別し、尺度による 5 段階で評定した。平均値が「1」に近いほど賛成を、「5」に近いほど反対を示している。平均値が「2.5」である場合は、賛成でも反対でもないことを示している。また、標準偏差が「0.7」以下だと収集したデータの数値のばらつき度合いが小さく、平均値周辺に集まっていることを示している。「0.8～1 未満」だと少しばらつきがあり、「1」以上だとばらつき度合いが大きいことを意味している。

以下 KOIBUCHI の日本語学習者のビリーフについて、5 つのグループに沿って分析を試みた。

1. 言語学習ビリーフ調査 (BALLI) の結果について

(1) 「教師の役割」について

この調査領域は学生が教師に求めていること、外国語学習における教師の必要性について問うている。

表 2 の半分以上の項目で平均が「2」に近くなっていることから、外国語学習においての教師への依存度がやや高いことがうかがえる。教師による定期的な試験は学習者にとって助けとなる (項目 12)、外国語学習に成功するにはいい教師が必要である (項目 1)、教師は学習者の学習環境を整えるべきだ。そして、学習者のサポートを続けるべきだ (項目 15)、教師にどのように外国語学習を進めるべきか教えてほしい (項目 5)、教師は学習しなければならないことを全て教えるべきだ (項目 9) ということを考えていることがわかる。教師の指導力の重要性について強く賛成していることから、学習者自身の自律性は低いことが推測される。しかし、教師への依存度が高いと考えられるにも関わらず、学習に進歩が見られなくても、そのことを教師の責任だとは考えていない (項目 14) という結果が出ている。これは教師に対して尊敬の気持ちを抱いているアジアの社会背景が影響していると考えられるのではないだろうか。

以上の点から、教師は学生の自律性だけに任せるのではなく、ファシリテーターとしての役割を果たし、学習面に関するアドバイスを積極的に行うことが求められていると言えるだろう。

表 2. 教師の役割

項目	内 容	平均	標準偏差
12	教師による定期的な試験は学習者にとって助けとなる	1.82	0.88
1	外国語学習に成功するにはいい教師が必要である	1.88	0.93
15	教師は学習者の学習環境を整えるべきだ。そして、学習者のサポートを続けるべきだ	1.91	0.91
5	教師にどのように外国語学習を進めるべきか教えてほしい	1.94	0.83
9	教師は学習しなければならぬことを全て教えるべきだ	1.97	0.88
7	教師は学習者がよく勉強するように動機付けるべきだ	2.09	0.77
3	教師に自分がどのくらい外国語学習が進んだか教えてほしい	2.09	0.88
4	教師に自分の外国語学習上の問題点や困難な点を教えてほしい	2.15	0.91
10	教師に個々の学習活動にどのくらい時間を使えばいいのか教えてほしい	2.24	0.87
6	教師が学習者を一生懸命学習させなければならない	2.27	0.91
8	教師に学習到達目標を設定してもらいたい	2.33	0.92
2	日本語の間違いは、教師が直すべきだ	2.36	1.17
13	学習者の評価は教師からされるべきだ	2.45	0.94
11	宿題は教師が学習者に出すべきだ	2.91	1.07
14	言語学習に進歩が見られなかったら、それは教師の責任だ	3.21	1.17

表 3. 言語学習の適性

項目	内 容	平均	標準偏差
21	すべての人が外国語を習得できる	2.00	0.97
16	ある言語は他の言語に比べて易しい。日本語は難しい言語だ	2.12	0.93
17	私は自分が日本語を習得できていると思っている	2.36	1.08
18	私の国の人は外国語学習が得意だ	2.39	0.93
20	私は外国語学習について特別な才能を持っている	2.79	0.82
19	数学や科学が得意な人は外国語習得が得意ではない	2.88	1.19

(2) 「言語学習の適性」について

この調査領域は学生が外国語学習における外国語習得のしやすさについて問うている。

表 3 から外国語学習における外国語習得のしやすさは、日本語は他の言語より難しい (項目 16) と思われながらも、すべての人が外国語、日本語習得の自信 (項目 21) については一番高くなり、日本語習得に時間と努力を要しているようである。私は外国語学習について特別な才能を持っている (項目 20)、数学や科学が得意な人は外国語習得が得意ではない (項目 19) については反対する傾向がみられた。

(3) 「言語学習の本質」について

この調査領域では学習している外国語をどのような言語であるかと考えているか、日本語のどの技能を重視しているかなどを問うものである。

表 4 から外国語学習では文法や翻訳よりも語彙の学習を重要だと考えていることがわかる (項目

27)。そして、私は趣味を楽しむように日本語を学んでいる (項目 34)、外国語をうまく話すためには、その文化を知ることが必要だ (項目 24)、外国語学習はその言語が話されている国で行うのが一番いい (項目 23)、日本語の学習は私の生活の質を豊かにする (項目 33) と考えている学生がやや多い傾向がある。

日本国内で学習している場合、教科書以外の日本語に日常的にたくさん触れ、日本語での専門の講義や学生生活していく中で語彙学習や日本文化の勉強も必要性がより実感され、ビリーフに影響を与えたと考えられる。

4 技能の中では「話す」よりも「聞く」ことのほうが易しいと考えている学生が 5 割 (項目 28)、「話す」ことと「読む・書く」ことを比較した場合は、難易度は「読む・書く」の方がかなり難しいと考えていることがわかる (項目 29)。「話す・聞く」は同じ国の仲間と自国の母語ばかり使っている

表4. 言語学習の本質

項目	内 容	平均	標準偏差
27	外国語学習の中で一番重要なのは、語彙の学習だ	1.82	0.95
34	私は趣味を楽しむように日本語を学んでいる	1.91	0.95
24	外国語をうまく話すためには、その文化を知ることが必要だ	1.94	1.00
23	外国語学習はその言語が話されている国で行うのが一番いい	2.06	0.97
33	日本語の学習は私の生活の質を豊かにする	2.09	1.04
28	日本語は話すよりも、聞いて理解する方が易しい	2.12	1.19
25	外国語学習の中で一番重要なのは母語からの翻訳の学習だ	2.15	1.00
26	外国語学習の中で一番重要なのは、文法の学習だ	2.18	0.98
22	外国語学習の方法は他の分野の学習とは異なる	2.21	0.96
30	外国語学習の中で一番重要なのは、きれいな発音で話すことだ	2.30	1.10
32	外国語を学習するとき、正しく話せるようになるまで外国語を話すべきではないと思う	2.64	1.06
31	言葉と直接関係ない間違い（身振り・手振り）は重要ではない	2.79	0.93
29	日本語は話すよりも、読んだり書いたりする方が易しい	2.88	1.19

ということかもしれない。「読む・書く」は漢字の問題もあり、苦手意識はやや高いかと予想していたが、調査対象者が中級後半終了レベルであるため、読む量・書く量とも語彙がやや多くなったことへの難しさも感じているということかもしれない（項目27）。

学習面では正確性を重視する傾向もみられるが（項目30）、一方「外国語を話すとき、正しく話せるようになるまで外国語を話すべきではないと思う」（項目32）と考える学生は少なく、外国語使用においては必ずしも正確性を重要視していないよう

だ。学習面で正確性を重視する傾向がある場合は、教室活動は消極的になりがちだが、結果を見るとその限りではないようだ。

(4) 「学習者の自律性」について

この調査領域は学生が言語学習において、どの程度自律性をもっているのかについて問うている。

表5から明確な目的を持ち、はっきりとした目的があって努力すれば上達すると信じ（項目35, 36）、自分で新しいことに挑戦するのが好き（項目41）、自分の間違いを自分でチェックするとき、一番学習できる（項目44）という学習者像が見えて

表5. 学習者の自律性

項目	内 容	平均	標準偏差
36	はっきりとした目的があれば、外国語の上達が早くなると思う	1.73	0.88
41	自分で新しいことに挑戦するのが好きだ	1.94	0.90
35	私は努力すれば、外国語が上手になると信じている	2.03	1.02
39	私は教師の言う通り勉強すれば上達が早くなると思っている	2.09	0.84
40	外国語を学習するとき、教師に助言を求めるのが好きだ	2.12	1.02
48	日本語を習うことはその文化を研究するためだけでなく、社会、政治、学科技術等を研究するためにも助けになる	2.18	0.92
44	自分の間違いを自分でチェックするとき、一番学習できる	2.21	0.96
37	計画を立てて勉強すれば、外国語の上達が早くなる	2.24	0.97
46	自分がどの程度学習できたか自分でチェックする方法がある	2.27	0.76
42	自分の外国語学習のどの部分を改善するべきかわかっている	2.30	0.98
38	学習意欲が強ければ、学習環境が悪くても外国語が上手になると思う	2.36	1.14
43	私は外国語をどう学習すればいいかよく知っている	2.42	0.90
45	自分自身で問題の解決を見つけるのが好きだ	2.55	0.87
47	細かい間違いを気にせず、積極的に外国語を話せる	2.85	0.97

表 6. 学習ストラテジー

項目	内 容	平均	標準偏差
59	日本語を使うなら、どんな活動でも日本語の学習の役に立つ	1.91	0.88
53	言語学習には教科書が必要だ	2.03	0.77
57	分からない日本語の単語は必ず辞書で調べるべきだ	2.03	0.88
49	時間がかかってもやさしい文型から難しい文型へと徐々に積み上げて学習していく方が、最終的には実力がつくと思う	2.03	0.92
58	日本人と日本語を話すのは楽しい	2.06	1.03
50	大量の反復練習（繰り返し練習）は重要だ	2.09	0.91
55	学習者が積極的に教室活動に参加するような授業は良い授業だ	2.33	0.82
52	CD などによる音声練習は重要だ	2.33	1.05
51	文法上の疑問点ははっきりさせないと落ち着かない	2.48	0.97
56	分からない語彙の意味を推測しても構わない	2.61	1.00
61	ほかの人と日本語で話すとき、不安を感じて臆病になることがある	2.70	0.92
54	教科書以外のものは、言語学習に役立たない	3.06	1.20
60	クラスメート同士で日本語を話しても役に立たない	3.18	1.21

くる。これは、教師への依存度が高いという結果から、学習者の自律性は低いと予想されていたことと相反する。しかし、私は教師の言う通り勉強すれば上達が早くなると思っている（項目 39）、外国語を学習するとき、教師に助言を求めるのが好きだ（項目 40）、もやや高いことから、学習者の自律性が高いとみられるものの、実際には教師に頼る傾向があると言えるだろう。

(5) 「学習ストラテジー」について

この調査領域は、学生が言語学習において、どのような学習ストラテジーを持っているのか、合わせて教室活動についても問うている。

表 6 では学習者がどんな学習方法を期待しているのか、また望んでいるのがわかる。日本語を使うなら、どんな活動でも日本語の学習の役に立つ（項目 59）、言語学習には教科書が必要だ（項目 53）、分からない日本語の単語は必ず辞書で調べるべきだ（項目 57）、時間がかかってもやさしい文型から難しい文型へと徐々に積み上げて学習していく方が、最終的には実力がつくと思う（項目 49）という学習

方法の割合が高いこと、教科書以外のものは、言語学習に役立たない（項目 54）、クラスメート同士で日本語を話しても役に立たない（項目 60）の項目が低いことから、他の学習方法を拒絶しているわけではない。実際 KOIBUCHI での授業では、プリントの資料で文型、語彙、場面やロールプレインという活動など行うが、教科書が必要だという項目の割合が高いため、これからの授業を行うために、教科書を使うことについての検討が必要であるかもしれない。

2. 上達させたい言語技能・能力について

「会話」、「聴解」、「文字・作文」、「読解」、「語彙」のうち、最も上達させたい能力優先順位を 1～5 の数字でつけて回答させた。表 7 に結果をまとめた。

表 7 によると、最も上達させたい能力は『会話』で、最も低いのは『聴解』である。

まず、最も注目したいことは、上達させたい言語技能・能力（表 7）は、1 位が「会話」、次いで、「語彙」「読解」「文字・作文」の順位ということが分っ

表 7. 「上達させたい言語技能」の順位別人数とパーセンテージ

	上位 (1/2 位)	中位 (3 位)	下位 (4/5 位)	合計
会話	20 人 61%	1 人 3%	12 人 36%	33 人 100%
語彙	16 人 48%	9 人 27%	8 人 24%	33 人 100%
読解	15 人 45%	9 人 27%	9 人 27%	33 人 100%
文字・作文	12 人 36%	9 人 27%	12 人 36%	33 人 100%
聴解	3 人 9%	5 人 15%	25 人 76%	33 人 100%

表 8. 「上達させたい言語技能」について他研究と比較表

	カムガムチョン (2021)	高崎 (2014)	阿部 (2009)
対象者 (出身国)	KOIBUCHI のアグリビジネス科国際農業コース (タイ, インドネシア, ベトナム, バングラディシュ, ネパール, インド, スリランカ)	メキシコにおける 9 機関の初級日本語 クラス (メキシコ)	スペイン・マドリード 自治大学での日本語 学習者 (スペイン)
実施国	日本	メキシコ	スペイン
1 位	会話	会話	会話
2 位	語彙	聴解	聴解
3 位	読解	文字・作文	読解
4 位	文字・作文	読解	文字・作文
5 位	聴解	語彙	語彙

た。同じく 5 つの言語技能に関する調査をメキシコで実施した高崎 (2014)、スペインで実施した阿部 (2009) では、「語彙」の順位はそれぞれ最下位、5 位とかなり低い順位となっている (表 8)。結果は逆であるということが分かった。日本国内で学んでいる KOIBUCHI の留学生は、語彙量の少なさがコミュニケーションの妨げとなっていることを日常での日本人との生活、アルバイトなどを通して実感しているからではないだろうか。つまり、積極的に向上させたい能力になりやすい可能性が考えられる。

VI 本調査結果を踏まえた教授法・教室活動への提案

1. KOIBUCHI 留学生の日本語学習者のプロフィールの特徴

以上の調査結果の分析から KOIBUCHI の留学生の日本語学習者のプロフィールの特徴は次の 10 項目に大別される。

- (1) 学習において教師への依存度が高く、教師とその教授法などに対して信頼と期待を寄せている。学習面でのアドバイスを求めている。言い換えると、学生自身の自律性は低いことがうかがえる。特に、教師による小テストなどの定期試験が学習の一助になると考えている。教師への依存度が高いと考えられるにも関わらず、学習に進歩が見られなくても、そのことを教師の責任だとは考えていない。
- (2) 言語学習について楽観的で教師の直接指導に対して期待が高いことを窺えた。
- (3) 外国語学習はすべての人が習得できるが、日本語は他の言語より難しいと考えている。
- (4) 学習者は教師の指導によって自律的に学習でき

るようになる。

- (5) 目標を立て努力することの重要性は理解しているが、まだ行動には結びついていない。
- (6) 語彙学習が重要だと考える傾向にあるが、文法学習もすれば、最終的に成功できると考えられる。
- (7) 日本文化学習が日本語学習の一助となると考えている。
- (8) 学習面では、教科書を用いて、やさしい文型から難しい文型へ積み上げて、分からない単語があれば、辞書で調べる等、正確性を重視しているが、言語使用面では常に正しい日本語を話さなければならないとは考えておらず、文法は間違っても、日本人と話すことを楽しむ傾向にある。
- (9) 定期的なテストや教科書が必要だと考え、伝統的な学習方法を好む。
- (10) 国外で行われた調査と比べて、「語彙」「読解」「文字・作文」を上達させたい言語技能の上位に挙げる学生が多く、反対に、「聴解」の順位は押しなべて低い。

2. 教授法・教室活動への提案

上述のプロフィールの特徴を踏まえ、授業改善策として次の 5 つを挙げたい。

- (1) 学習目標、学習計画の達成確認をチェックできるシステムの構築
教師への依存度、信頼度は高い (表 2) ので、学習者が重要性を認めている「学習目標、計画」(表 5) が達成できているかどうか教師と学習者が共にチェックしていくシステムの構築が有効だと考えられる。例えば、従前の定期テストのフィードバックでは、時間的制約もあり、クラス全体で間違いの多かったところを中心に教師が板書して直す、あるいは

は、学習者同士で完全答案を作るなどしていたが、可能な限り、フィードバック時に教師が個別に誤答を指摘し、どの程度学習できているかを教師と共にチェックすること（項目 44, 46）が有効なのではないだろうか。このことは、学習面では正確性を好む傾向にあるピリーフに沿う（項目 50）活動だと考えられる。

(2) 教室外におけるアクティビティの実施

一番上達したいことは会話だったため、コミュニケーションを重視した教室活動を好む傾向にあり（項目 12, 59, 60）、日本人と日本語を話すのは楽しい（項目 58）傾向と合わせると、「学習したことを教室の外で使える機会（日本人へのインタビュー、アンケート調査）」など積極的に教室外へ出かける活動も随時取り入れるべきであろう。

(3) 伝統的な学習の徹底実施

定期的なテストや教科書が必要だと考え、伝統的な学習方法を好む傾向にあり（項目 12, 53）今まで教師が作ったプリントを使用しているので、KOIBUCHI の留学生に最適な教科書を選び、それを使用して教えるべきだろうか。小テストや定期試験等はこれまで実施しているので、これからも実施し続ける。

(4) 語彙力の養成

KOIBUCHI の留学生は海外の日本語学習者よりも語彙学習の必要性を強く感じていることから、学習者に「語彙ノート」を作らせることも一つの方法だと思われる。授業中に限らず、日常生活の中で出逢う、覚えたい「新語」とその意味を母国語で書き、その横に日本語で例文を作成する。そのノートを定期的に教師がチェックする。あるいは、「わからない日本語の単語は必ず意味を調べるべきだ」（項目 57）はかなり強く支持されているので、この「語彙ノート」は中級レベル以上では欠かすことのできない自律学習の習慣や、教室だけでは十分とは言えない語彙の補充にも役立つものと思われる。

(5) 読解力の養成

KOIBUCHI の留学生は母国や海外の日本語学習者よりも読解学習の必要性も強く感じている（図 1）ことから、現在日本語能力試験資格対策講義のみ読解力の養成をしているが、資格対策講義のみならず、普通の日本語の授業も時間をかけて、読解力の養成も実施し、学習者に学習目標が見えるように、「身に付けるスキル表」を作り、毎回の授業で身に付け

る表にチェックする方法とする。教材は、日本文化学習が日本語学習の一助となると考えている（項目 24）ので、読解内容については、日本文化に関するプリントを利用し、読解力の教授法は精読法授業で進め、以下のように実施し、有効性を確かめたい。

1) 読解問題を読む前にすること

動機付けをする（タイトルや出典元、絵や図についてイメージを膨らませる）

語彙・表現を確認する（キーワードのみ確認する）

2) 読解問題を読む

3) 読解問題の内容を確認する

読解文を音読する

読解問題の内容を確認する（設問の答え合わせ）

読解問題の内容から広げる（要約、ディスカッションなど）

VII おわりに

以上、本研究では KOIBUCHI の留学生の日本語学習者のピリーフ調査を実施し、その結果から 10 個の特徴と 5 個の授業改善策を示した。今回の調査により、予想された「多国籍や学習環境の違い」がピリーフに何らかの影響を与えることが確認された。ただし、教育現場で求められるのは、こうした調査結果そのものではなく、その結果を基にどう授業を改善していくかということである。VI の 2 で提案した授業改善案などを実際に授業に取り入れ、その有効性を今後も確認、再考していきたい。

また、今回の調査データは一時点で、全体的な留学生の日本語学習者の結果のものである。今後、留学生のそれぞれの国のピリーフと比較すること、継続的にピリーフ調査を行い、その変化の有無にも注目し、合わせ、ピリーフと成績の相関性の有無、その変化についても研究を続けていきたいと考えている。また、多くの先行研究にもあるように、教師へのピリーフ調査（松田 2005, 内田ら 2019, 松本 2019）も必要であろう。今後は、質問紙調査の中に自由記述部分も加え、できれば、グループインタビューなども実施し、質的、量的により充実した調査を行いたい。そして、それらを踏まえた上で学習者にとって有益な授業ができるよう、よりよいカリキュラム作りに反映させたいと考えている。

VIII 参考文献

- 1) Horwitz E. K. (1987), *Surveying Students Beliefs About Language Learning*. In A.Wenden & J.Rubin (Eds.), *Learner Strategies in Language Learning*. pp.119-129. London: Prentice-Hall.
- 2) 阿部 新 (2009), スペイン・マドリードの大学における日本語学習者の言語学習ピリーフ. 名古屋外国語大学外国語学部紀要 **37**: 25-62.
- 3) 内田陽子, 坪根由香里, 八田直美, 小澤伊久美 (2019), あるタイ人日本語教師のピリーフの形成—初任期から4年間のPAC分析による縦断的調査から—. *言語教育学研究* **10**: 1-11.
- 4) 小林亞古 (2016), タイ中等教育における日本語学習者の特性. *人間科学研究* **29**: 103.
- 5) 齋藤ひろみ (1996), 日本語学習者と教師のピリーフ—自律的学習に関わるピリーフスの調査を通して. *言語文化と日本語教育* **12**: 58-69.
- 6) 板井美佐 (1997), 言語学習についての中国人学習者の BELIEFS —上海復旦大学のアンケート調査より—. 筑波大学留学生センター・日本語教育論集 **12**: 63-88.
- 7) 板井美佐 (2000), 中国人学習者の日本語学習に対する BELIEF について—香港4大学のアンケートの調査から. *日本語教育会・日本語教育* **104**: 69-78.
- 8) 高崎三千代 (2014), メキシコにおける日本語学習者の特性—ピリーフ調査結果を中心に—. *国際交流基金日本語教育紀要* **10**: 23-38.
- 9) 日本語教育学会 (2005), *新版日本丁教育事典*. 大修份書店: 807.
- 10) 府川祐子, 佐藤順子 (2002), 新学習計画決定までの経緯と現状報告. *国際交流基金メキシコ事務所・国際交流基金メキシコ事務所紀要* **2**: 25-39.
- 11) 松田真希子 (2005), 現職日本語教師のピリーフに関する質的研究. *長岡技術科学大学言語・人文科学論集* **19**: 215-240.
- 12) 松本匡史 (2019), コスタリカ日本語教育における NT と NNT の同異点—言語学習ピリーフ調査を通して—. *さいたま言語研究* **3**: 13-25.
- 13) 若井誠二, 岩澤和宏 (2004), ハンガリー人日本語学習者のピリーフス. *国際交流基金・日本語国際センター紀要* **14**: 123-140.